94　**誌上発表**

腰背考（二）

――『諸病源候論』巻五・腰背諸病を中心として――

吉岡　広記，山田　恵美

日本鍼灸研究会

腰背諸病概観

腰背諸病は，腰に関する①腰痛候，②腰痛不得俛仰候，③風湿腰痛候，④卒腰痛候，⑤久腰痛候，⑥腎著腰痛候，⑦臀腰候，⑧腰脚疼痛候，背に関する⑨背僂候，脇に関する⑩脇痛候より成る．これら10論は，項を肝，肩背を肺，脊を脾，腰股を腎，胸脇を心の領域とした『素問』『霊枢』とは異なり，『病源』では腰を腎，背と脇を肝の病として考えている点に特徴がある．

腰痛8論略説

①腰痛候には，風冷により腎経が虚した場合のほかに，少陰，風痺，腎虚，臀腰，寝臥湿地として，病態による分類が5つ挙げられている．この分類は，各論に対応していることから，総論としての意味合いもあると言える．

病論の配列からは，巻3～4・虚労諸候で見られたような病の時間的な推移や軽重という視点は明確には感じられないが，次のようなことは見て取ることができる．まず，①腰痛候冒頭の「腎主腰脚．腎経虚損，風冷乗之，故腰痛也」を以て腰痛の基本的な機序を端的に示し，②腰痛不得俛仰候において腰の前後の動きの傷害を陰陽により分類し，③風湿腰痛候では，腰痛を起こす風冷（風湿）を得る場面の1例を示し，④卒腰痛候と⑤久腰痛候では腰痛の急性と慢性の別を挙げ，⑥腎著腰痛候では腰痛が進み風冷（風湿）から風水へと重くなった場合を説き，⑦臀腰候では風冷だけでなく外傷（墮墜）によっても起こることを述べ，⑧腰脚疼痛候では「腎主腰脚」を承け腰のみならず脚にも痛みが出る場合があることを最後に添えている．

なお，これらは，腎虚（下焦の虚）による液（内陰：小便と精）と形（外陽：腰以下と陰器）の変調を構造的に示した巻四・小便利候より虚労陰瘡候に至る22論からうかがえる，変化しやすい液の変調にはじまり，次第に変動の遅い形へと移行していく段階の後者に属すと見ることができる．このモデルは，液の段階ではまず小便に異常をきたし，暫時，精にも問題が及び，虚冷から虚熱へと転化するに伴い，小便利から難へ，精の欠乏から血の混入へとそれぞれ病が進む．また虚冷（ないし虚熱）のある段階から風（陽邪）が入ることで形（外陽）の変調をもきたし，風冷から風熱へと移行する過程で腰以下から陰器へと病が至ると構想されている．墮墜による臀腰候を除く7論で，必ず風が関与する所以である．

背脇2論略説

⑨背僂候は，その機序（風寒搏於脊膂之筋）からは背筋が曲がると解されるため，「背」は腰を含む背面全般を指し，肺の領域である上部の「背」ではないように見える．ただ，これに続く⑩脇痛候（足少陽の絡と肝の病）と合わせ考えると，上部の「背」＝肝の領域と解して，腰（下）と背（上）の位置関係と腎（陰）と肝（陽）の陰陽とを対応させ，下（陰）の病が上（陽）へも影響し，さらに外（横）に広がっていくという2つの段階を示していると見る方がよいと思われる．⑨脇痛候は，丁光迪『諸病源候論校注』155頁（人民衛生出版社，1991年）に「脇痛一候，与腰背痛関渉較少，蓋従肝腎之病同一之理，連類而及者」と指摘されているように，腰背の一部ではなく，心腹（胸腹）を論じた巻16・心腹痛病諸候に列せられるべきであるが，足少陽の絡を介して肝と脇を上手く結びつけている．これと似た論理で，⑨背僂候でも暗に肝＝脊膂之筋＝背としているものと考えることができるからである．その一方で，背僂は『素問』脈要精微論篇の「背者胸中之府，背曲肩隨」に従い肺の病とし，それ以下の腰が曲がるものを腎の病としてさらに区別するという道もあったように思われる．

腰背諸病の由来

以上より，腰痛諸病ではなく腰脊諸病として肝腎の論を展開した理由は，心脾に関する心腹痛病諸候を対置することにあったと考えられる．また，そのために肝に関わる論を2つ以上にする必要にせまられ，腰背とは直接に関わらないものの，肝に結びつけられる脇の病證を加えたものと推察される．